

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	不安な年頃の意識 : 創作
Author(s)	田上, 旺作
Citation	龍南, 222 : 47 - 59
Issue date	1932-07-03
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7073">http://hdl.handle.net/2298/7073</a>
Right	

# 不安な年頃の意識

文二乙 田 上 旺 作

## I

港街の空は遙かに霞んで見える春の午後の中にその明色を薄めつゝあつた。

長い幾つも見える突堤とそれにくつついた棧構とが海の中に巨體を突き出して見えた。澤山の汽船が錨をおろして靜かに出帆の日を待ち港についた喜びを吐き出してゐた。

街の灯が段々その存在を明かにして來ると共に海が黒くかはり白く揺れる様になつた。人々は忙しそうにあらゆる電車の終點から吐き出された。皆輝かしき理想の幻影を求めて苦痛な現實の生活に満足してペーヴメントの雑踏に消えて行つた。

街の夕暮の中には憂鬱が潜んでゐた。曖昧な潜在的憂鬱が時間を経過するに連れて無意識のうちに水の波紋の様に一杯に廣がつていつた。

亦今日も一日が暮れてゆく。あらゆる悩み、苦痛、悲愁。平凡、歡喜、悅樂、實相、眞實、野望。復讐、虚偽、瞞着

出鱈目、そして最後に破綻と成功とが高架線を走る列車の様に物凄い渦巻を作つて過ぎ去つていつた。人間の心の中には闘争があつて平和がなかつた。しかし皆はそれに満足してゐた。習慣の情性によつて平和を粧ほひ、平和を確信してゐた。

喧騒な機械の音が眞暗になつた夜の中に消え去つて終ひ、イルミネーションが新しいエネルギーを空に向つて投げつけてゐた。

上層を冷い氣流が吹き流して去つた。

## Ⅱ

變な悲しい氣持に襲はれながらしかもそれとは全く別に動いて行く自分の足を如何にもならないなげやりな風に考へてゐる間に僕は何時かガードの下を通つてゐた。

頭の上を電車が走り去つた。疾風の様に流れるあの空氣の中を身體を大地と平行にして潛空運動を電車の側面にやる事が出来たら、僕はどちらを見ても青い水がうねつて絶え間なく消えてゆく見渡す限りの海の上で時たま空に浮んでゐる千切れ雲を眺めてスイと水の上にはね出してゆく飛魚よりもつと幸福な愉快な自分になるだらう。海では幾日も幾日も唯青い波の間に白い泡を浴びて泳ぎ続けるだらう。自分一人で青い波を背にして太陽が何處かになつかしそうに照つてゐる青い空を思ふ存分樂しめるだらう。そしてむせうに人間を戀しがる時が飲む水のない海の上で飢餓と疲勞と一緒にしてやつて来るだらう。そんな時に自分は矢張り泳ぎ續けて水の上にはね出す機會を待つのだらうか。…………

突然僕は自分の前を嵐が吹き去つて行くのを感じた。そして血が逆流する様な心臓の響きを聞いて顔をあげた。自動車黒い姿の中に赤い灯を残して見えなくなつて行つた。

僕は煙草の煙を大きく胸の中に吸ひ込んだ。そして何時下宿を飛出して街の雑踏にまぎれ込んでいつたのか気がつか  
なかつた。しかしそんな事を知つて如何すると云ふんだらうか、僕は今無駄な事を考へてゐると云ふ事を知つて止して  
終つた。

大抵足が都合の好い所に歩いて行くだらう。そして自分はそれに絶對の信頼をおいて好いだらう。

僕は何時の間にか横町に入り込んでゐた。足を前に延ばして廻轉ドアの中に捲込まれた。暑いむせる様な空氣を鼻  
の先に氣にしながら一寸顔をあげた。

そして「キヤラパン」に來たんだと云ふ事を知つた。僕はその時自分は如何かしてゐるんぢやないかと思つた。

女がやつて來た、僕はだまつて後からついて行つた。テーブルに腰をおろす迄何にも見ない事にした。

—何にいたしませう？

女は向き合に腰掛けて僕の顔をのぞき込む様な恰好で尋ねた。

—キュラツソーをね。

僕はタオルで手をふきながら無雜作に流し目に女の顔を見て答へた。

—今晚は。お友達がさつきから待つてらつしやるわ。

—今晚は！ 誰？ Kだらう。後でゆくからつてそう云つといてくれよ。

僕はA子が横に腰掛けて來たんで前向いた儘でぶつきら棒に返事した。A子が嫌ひつて事はなかつた。それ所か僕は今でも尙自分がA子を愛してゐる事を知つてゐた。僕とA子との間はもうあれから一年位なつてゐる。しかし今晚は如何して此んなぶつきら棒な返事しか出ないのか僕には分らなかつた。

女がキュラツソーを持つて來た。僕はA子の唇に一寸グラスを當てゝキュツとひといきにのんでしまつた。

一寸Kを呼んできておくれよ。

僕は漸つと笑へる様になつたのでA子に話しかけた。前の女が――未だ召上る？――と聞いたんで指を二本出した。そして女が立ち上つたのと同時に僕は僕の右手をたゝかれた。A子はあんな合圖ヤンキー嗅くつて不可ないんだと……でも彼女はそのくせ街で會ふと何時もきまつて投げキツスをやるし、そんな僕に前の事なんか覚えてゐたら顔をはりとばしたる積りだけど……。

そして彼女のアパートに行つて遊んでゐる時なんか一寸怒つても彼女は直に首に嚙りついてきて『御免なさい』つてベタ／＼僕の顔に紅をつけるんだから……。

僕はそんな事考へまいと思つた。一々考へてゐると頭が痛くなりそうだと思つて見た。たしかに充分にありそうに思へて僕は愈々止して終つた。

Kが僕のボックスにやつて來た。ろれつの廻らない怪げな口でビールを逆さにした。それでも自分のした事には未だしつかり覺えてゐた。シネマの歸りに一寸寄つて見る積だつたらつい長くなつてと變に改まつて來たんで彼の手に握つてゐたビールを亦逆に彼の口に當てたら横にへばり込んでしまつた。

僕は頭が漸くフラ／＼して足のよろめきそうなのを意識した。僕は立ち上らうとしたが駄目だった。容易に立ち上れなかつた。よろめく足取で彼女と一緒にKを自動車迄抱へ込むともう自分迄がへばつて終ひそうだった。

—もう直に時間だらう。君もこの車と一緒にのつて行かないか。

僕はA子に乗る様に誘つた。

—あたし直に來るから一寸待つてね。

彼女は一寸小走りに中に入つて行つた。僕は頭がぶか／＼して來るのを感じた。變だな—まあ何でも好いや—僕は直に逃避的氣持になつてゐた。

—遅くなつて濟みませんでした。

A子は漸つと來た。

—いやに濟ましたら承知しないぞ。

僕は酔拂つてA子の耳に口をつけてさゝやいた。

—だつてね、仕方ないもの、先刻はあなただつて……

とに角Kさんを前に寝かしておいてあたし達後ろに乘らなきや駄目よ。

僕は何か變に笑ひ度かつた。A子の顔にぶう／＼煙草の煙を吹きつけてやつた。

僕は余り笑つて何か身体から抜け出した様な氣持がした。自分だけ取残された様な感じがしてならなかつた。若かしたら僕は車に乗つてないかも知れない……………。

深夜の街を走つて行く車のヘッドライトが時々交錯して僕は自分の目を閉じた。しかし僕は未だ眠つてゐなかつた。やつと車が彼の下宿迄着いた。僕等は彼を抱へる様にして家の中に擔ぎ込んだ。

再び車に乗つた時僕は激しい疲労を感じた。頭の中ではキュラツソーとビールがクル／＼神経を廻はしてゐるらしかつた。僕は女の顔を見上げた、しかし何にも見えなかつた。眞暗だつた。僕は顔の上に始めて彼女の顔を感じた。しかし亦再び目を閉じた。……

僕は水道の栓の下に頭を据えた。冷い感じが一度頭の中を流れた。

しかしタオルでふいて終ふと亦暑くなつた。僕は引きちぎる様にズボンを脱いでベッドにもぐつた。顔が亦迎も火照つて來た。僕は冷たいハンカチをA子に持つて來さして顔の上に載せた、微かに自分のでない事を意識してゐた。香水の香が僕の鼻を強くついたからだ。

何にも思ひ出せなかつた。目が自然に閉ぢられて終つた。僕は横のベッドに彼女がもぐり込んだのを漸つと知る事が出來た。

### III

僕は眞晝の街を歩いてゐた。腫れつぽたい目に強い光線がギラ／＼反射してすっかり僕の頭を駄目にしてしまつてゐた。僕は今日B子と都ビルの角で會ふ事になつてゐた。

もう約束の時間を十分過ぎてゐた。しかし僕は二十分位彼女を待たせてもかまはないと思つた。此の前の約束には彼

女は約束の時間後十分間も待つても來なかつたから……それで僕は歸つて終つた。後で彼女の話によると十五分位後に來たと云つてゐたけれど如何だか僕は余りたよりにならないとも思つてみたが矢張り眞實らしかつた。

僕は敷石を數へてふんでゐた。彼女には二十分待つ元氣があるかないか僕は一錢銅貨を投げ上げて見た。しかし僕の手中には裏が出てゐた。彼女はゐないと思つた。そして顔を上げてビルディングを見上げた。

——今迄何してたの、随分遅いのね。

僕は背後を振返つて見た。彼女が怒つた様な顔付して横にぶいと向いた。しかし彼女の横顔は笑つてゐた。

——君は今日待つてないと思つたんだが……

——その次なんとつけるの、あたしあなた見たいに十分間待つて、さつさと歸る様に出來てないのよ。

彼女が僕の言出した後をとつて終つたんでちよつとしやくにさわつてさつきの一錢銅貨を彼女のお尻に投げつけてやつた。

——生意氣云ふなよ。あれや君が悪いんだぜ。

——そんな事云ふんだつたらあたし歸るわ。

——そうか、そんなら左様なら。僕も歸るよ。アバヨ。

僕は二三歩、あるきだした。

——ちよいと待つてゝよ。

彼女が追かけて來た。僕は出来る丈圖太くかまへてやらうと決心した。



—— あたしケンカするのもう止すわ。

—— そんなら何處かでオゴレよ。伸直りには昔からつきものがあるつて事位知つてゐるだらう。チャンバラでも酒一升はあるからね。

—— 迎もあつかましいのね。あたしういはんわ。誰にでもその手でやるんでせう。

—— 馬鹿云ふなよ。レディは貴女一人で御座いますよ。

—— バカく、ほんとに仕様のない人ね。何でも好いから兎に角あたしについて來なくては駄目よ。

彼女はあひるの雛見たいにおとなぶつて命令し出した。

僕はニヤ／＼笑ひながら彼女の後からついていった。

彼女はプチ・ブルのお嬢さんで不良女學生の肩書がついてゐる。僕は未だ彼女の制服姿を見た事がない。何時も外出着のドレスなんだから……

僕は彼女の腕をとつた。彼女は伸直りしてからは迎も元氣になつて僕の上に君臨して來た。完成された女のように。

僕等はサロン・フランセーズに入つて行つた。

—— 何にするの。あたしレモンスカッシュにするわ。

—— 何でも好いけど……君と同じにしよう。たばこないよ。

彼女はハンドバックからM・C・C取り出して僕に呉れた。

まだ封切が切つてなかつた。僕は彼女の顔を見つめた。

——何見るの。いやね。あたしに出してよ。

——是まだフロイラインなんだぜ。

——そうよ。だから好いでせう。さきに一本とつたら。あたしは後でも結構。

僕は微笑を舌の先にかみつぶして済まして二本くわえて火をつけた。

B 子はどんな氣持か知ら。僕は有利に樂觀的に感情をつないだ。彼女が可愛い、ラウンドカールを見せてゐた。僕はストロウをくわへてかき廻した。

——今日君學校へ行つた？

——あたし行かないわ。つまらない上に面白くない。

彼女はどんざいな口調で云つて視線を合はした。

——勿論キミも行かなかつたでせう。

——つまらない、上に面白くない、のろまな講義聞いてゐると間が抜けちしもふからね。しかし余り出ないとクビになるから出た方が好いぜ。

——夫誰に云つてゐるの、あたし？

——誰つて學校ボル奴によ。しかし此處では君も僕と二人にでもかまはないよ。

——あたし今日何處かへ行かふと思つてゐるけど、あなたも一緒に来るね。

彼女は妙にしんみりして口をきいた。

十七歳の女の感情、僕は此の感情を遊べば好いのだ。

しかし僕は如何なつて行くのだ。僕は野心家ぢやない。僕は野心家なんてなる事は出来ないのだ。何時だつたか「赤と黒」の主人公のジュリアン・ソレルを目標において總ゆる理性の全能を振り廻して自分の計畫の中に入り込んでゆかうと決心した事もあつた。しかも僕の理性は感情の前には土塊の要塞にも等しかつた。

僕は一度考へ直して見た。自尊心が、快樂の絶頂にある時でさへも尙矢張り女を征服する事に熟練した男の野心の一部分だと考へる事を、維持するだらうか。

そんな事は如何でも好い。だが女はだに見たいな極端な現實主義者だと云ふ事を忘れては不可ないのだ、今それ丈を覺えてゐれば好い。その外に何を考へておけと云ふのだ。

### III

僕は他人並の人間だと今日泌々思つた。誰だつてそうなつてゐる。僕は散々嘘をついてゐた。

それだのにお前は何にも知らないC子、お前には僕の嘘が眞實だと思はれたのだらう。僕がお前に長い間熱い想ひを寄せてゐると云つた時のお前の瞳には美しい夢の中に浸つてゐる時の様に露が浮んでゐた。そして僕がお前の手をしっかりと握つた時お前の戀情はお前の胸の中で一時言葉が出ない位燃えてゐたのだ。

C子、お前には始め僕が必ず結婚して見せると云つた時僕の氣持が分らなかつた。そしてその上お前は結婚の不可能を信じてゐる様に云つた。しかし僕の口は迎も素晴らしかつた。お前のそんな氣持を僕はしつかり捉へてしまつた。そ

してお前は僕の胸の中で僕の考へてゐる様になつてゐた。お前はそれから薄いカーテンの傍に行つて泣いてゐた。お前の瞳から落ちてお前の頬に傳つて流れてゆく涙のあらゆる滴にお前の喜びがこもつてゐた。しかし既にその時から僕は自分の慢心からお前の心の中に僕の嘘を注ぎ込んでゐた。僕はお前に濟まないととは思はなかつた。僕の愛情と僕の青春とはお前を僕の手の中から離そうとはしなかつた。僕はお前に感謝し度かつた。僕の唇にはお前の可愛い、ペーゼの薄跡がついてゐた。僕は鏡の中に僕の顔を寫した。お前の顔が僕の肩の上出からてゐた。僕等はあの晩長い間、闇の中で彷徨してゐた。

今でも僕は僕の嘘が決してお前の心に對して恥ぢねばならぬものだとは思つてゐない。あの時僕はお前の幸福を考へてゐた。お前にはあんな楽しい幸福はなかつた。しかし僕は心の痛傷を段々増してゆく許りだつた。けれどもお前の欣びのためには僕は辛捧した。僕はお前の幸福が僕の痛傷をもすっかり消して終ふだらうと考へてゐた。しかし僕の前の女の心は余りにも深く僕の心の中に喰ひ込んでゐた。僕はお前と話してゐる時でさへも前の女のさゝやきを聞いてゐる様な氣がしてならない様になつてゐた。僕は屢々お前の強い戀情を思ひ出した。お前との戀のしるしの數々も僕の心の中に留めておかうと努力した。そして夫が僕の心の中に思ひ出されるのもあつた。しかし前の女は僕がそう努力すれば努力する程僕の心を自分の方に向けさせないではおかなかつた。

實を云へば僕が嘘だつたと云ふのも此の頃だつたかも知れない。

美しい朝が段々憂鬱な夕方になつて行く様に僕には思へてならなかつた。しかしお前はそんな事は少しも氣附かなかつた。お前に僕はそんな素振は微塵も示さなかつたんだから。

僕は矢張り、C子、お前を愛してゐると思ふ。愛情の分散なんか出来る筈はないと思つた。僕はお前に何時もそう云つてゐた。しかし今では僕にはそれがわからなくなつてしまつた。前の女と一緒にゐる時にも僕は愛してゐると思つてゐる。しかしお前と一緒にゐると矢張りお前を愛してゐると云へそうな氣がするよ。云へると斷言しても好いよ。

しかしお前が僕のこんな氣持を許して呉れるなら僕は亦、お前を愛すると今迄通り續けてゆくだらう。しかしお前がそれを許して呉れなかつたら僕は今迄のお前との愛情を止めなければならぬだらう。しかし僕はその時のお前を愛してゐたんぢやなかつたとは思はないだらう。それ所かお前との愛情の強かつた事を考へて胸が痛むに相違ない。之は決して未練からではなしに……。

何故なら今も云つた通り實は僕自身すらこんな混亂に陥つてゐるだらう。僕は初めからお前の戀を僕の戀と結びつけてゐた筈だから。

僕はお前に左様な事を云ふべきだらうか、僕はもう云ひ度いのか、云ふべきなのか分らない。しかし僕に偽りの戀よさらばなんて云ふ氣持はどんな陰慘な思ひを僕にさせるかし、僕はお前は許して呉れないと思ふ。

しかしC子！ 若しそうだとすれば僕等はお互に永久に路傍の人となつて終ふだらう。

C子、僕はお前が僕を愛してゐると同様にお前を愛してゐる、愛情の分散ぢやない。お前の事を僕はお前と一緒にゐる時一番強く感ずるからだ。しかしお前以外他の女とゐる時亦その女の事を一番強く感ずる、しかも僕はお前を愛してゐる。お前は未だこんな事知らないでゐる。僕は今一人で書いてゐる。

別離が考へられる、今は僕丈だ、しかしC子お前もすぐにそんな感情を知らねばならない。僕が散々泣き出したら、

お前も泣くだらう。傷ついた想ひ出、しかしお前との熱い想ひ出は僕の涙の滴の中にある。僕はお前の膝の上に泣きたい。僕の心が沈んでゆく。

「青春よお前は僕等の身体の中から去つてしまふだらうお前の腕の中に戀を抱いた儘で」

## V

春から夏にかけて學校の生活が続いていつた。長い一日に思はれて仕方がなかつた、しかしそれでもふりかへり見る時短かゝつたと云ふ事を壓倒的に意識されねばならなかつた。時には理想が目前に来てゐると云ふ事を無理にも考へる時があつた。理想と云ふものは僕等の前では迎も現實的なものに變つてゐた。

動搖がいつも小刻みに僕等の頭の中に襲ひ來つた。僕等は如何なつてゆくだらうか。自分自身では考へた通りになつてゆくと思ふ時もある。しかしもうそんな氣休めでは不安と焦燥を覆ひかくす事は出来なかつた。直に破れて終つてゐた、僕は長い間それを納得せしむるために自分の心を轉換させねばならなかつた。そして何時の間にかそれが現實の生活の中に再び逆戻りしてゐる事を知らねばならなかつた。

外では一年毎に嘘と、偽善の進歩が飛躍的になされてゐただ何の不安もないかの様に生活は續けられた。何時突發するか分らない破綻を目前に考へて憂鬱にならなければならなかつた。

僕は飛躍しようと思つた。組織的な才智と鋭い迫真力と感覺とで。……

そして破壊され粉碎されたコンクリートの上に愕然として傍觀してゐる姿を見出さねばならなかつた。一九三二・六・二一